大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

登校する生徒にもある不登校感

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 平木, 雅己, 桐村, 雅彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004723

登校する生徒にもある不登校感

平木 雅己*1・桐村 雅彦

はじめに

大阪市立大学の森田（1991）は、「不登校現象が、もはや一部の限られた特定の生徒の問題ではなく、学校教育に関わっている多くの子どもたちに共通して見られる問題である。」と述べ、広がるグレーゾーンについて研究した結果を報告している。その報告の中では、不登校の潜在群が42.0%にも達していた。

同じ1991年、文部省は「不登校は誰にでも起こりうる現象である」ことを認めた。また、評論家の小浜・竹田（1991）は「現在の『不登校』というのは、かなり大衆的な基盤での学校に対する忌避感覚、忌避的な気分、つまり、気分として学校がおもしろくないということである。」と指摘した。このような考え方は、この時代に教育関係者以外の人たちにも確実に広まっていったと言える。

1991年はこの不登校に対する考え方の枠組み転換の年であり、この年に高等学校の教育現場で働く私たち教員も、これまでの長期欠席生徒の調査を集計し分析と討論を試みた。その結果、学校を頻繁に欠席する現象は一部の限られた“ひきこもり”の生徒だけの現象ではなく、様々なタイプの子どもたちにも幅広く見られる現象であることがわかった。

そこで、本研修期間中の課題として、現在登校している高校生たちが潜在的に内在化させているであろう不登校感の程度と内在様式を調べることにした。

＊1　1996年度府大学派遣研修員・現府立堺西高等学校教諭

また家族・友人・教員と共通の話題を持ち、精神的な支援を得ることや、学校適応感とりわけ不登校感との関係をも併せて探り、検討することも課題に加えた。

森田（1996）は、不登校を学校制度の問題として捉えられており、「問われるべきことは学校が子供達に我慢の足るものをどれだけ提供できているかということである」、「学校へのつながりの糸をどれだけ太くするかどうかは学校生活の中にどれだけプライベート・スペースが確保されているのかによる」という。また森田は、S・コーエンの説を援用して、「学校生活の様々な領域から（生徒達の）離脱空間が縮小している」とも指摘している。確かに森田の仮説は優れていると思える。しかし、実際に教育現場で働いていると、現代の学校にプライベート・スペースが少なくなっているのはよくわかるが、それをどう実現すればよいのかが、なかなかわかりにくい。森田の言う「離脱空間」を空間的・質的・時間的により拡大させることは、日頃の我々の教育現場での今の議論の質から考えると、まだまだ遠いという実感がある。生徒の実態を「把握する」というのが議論の主流になりえても、「離脱空間」の拡大が教育現場での議論の主流にはなりえないのが現状である。そのような議論と職員の合意形成に時間がかかっている間に、生徒達はあっという間に高等学校の3年間を通り過ぎてゆく。生徒達の時間は、制度や環境の変革の時間を待ってくれない。

このような現実のなかで、今の生徒達が現す症状は、今ある社会的資源としての人間関係のなかで支援していくしかないのである。友人の支援、教員の支援、とりわけ子供の未来に多くの期待を持っている家族の支援のなかで、子どもの症状を癒していくしかないのである。教育のパラダイムの転換と教育改革とは、そういう現実的な子どもへの支援の積み重ねのなかで、共に考え進めていくしかないわけだし、また、家族のパラダイムも視野に入れながら、子どもたちへの関わり方を考えていくしかないわけである。

また小浜・竹田（1991）は、「現代では『養育』のうちかなり大きい部分が『教育』として現れざるを得ない。……従って『親子関係』の現れとして、教

育あるいは学校の問題を見ていくことができる。」と、すぐれた示唆をしている。家族は我が子に多くを期待をしはするものの、いつの世も今ある教育環境のなかで様々な問題にぶつかりながら、親子ともども、今あるかたちのままの高校教育という一種のイニシエーション的な機能を、悩みながら支え合いながら、時として変革への意志表示もしながら、くぐり抜けていかざるを得ないものである。子どもの学校生活を支える家族の精神的支援の役割や、逆に揺らぎつつある現代の家族の様々な症状との関連で、学校の役割をも検証することができればなおよいのではないかとも考え、本課題の少なからぬ部分に、学校適応感と家族の精神的支援との関係を組み入れた。

調　査

二つの尺度作成における調査対象者

大阪府の北部、東部、南部の府立高等学校の1・2・3年生496名を対象とし、1996年10月の中間テスト後に質問項目への回答調査を実施した。そのうち回収された調査票は492名（男子230名・女子262名）であった。調査当日の欠席者は496名中3名であり。残る1名分だけは未回収であった。不登校感の調査にもかかわらず、出席率がたいへん高かったのは皮肉ではあるが、今回調査に協力してくれた学校の傾向でもあり、また、調査時期にもよるのかもしれない。回収された調査票の内、回答に不備のない有効回答数は487名（男子227名・女子260名）であった。有効回答者の欠席日数は、2学期の中間考査までの欠席日数で、5日以内の生徒が414名、5日～10日の生徒が92名、11日以上の生徒が19名であった。

不登校感も含む「学校適応感尺度」

生徒の不登校感を調べるために、内藤・浅川・高瀬・古川・小泉（1987）の「高校生用学校環境適応感尺度」をつくりかえた。内藤らの「学校環境適応感

尺度」は中学校から高校へ進学した生徒の適応感を見るための尺度であり、直接不登校感を調査するものではない。そこで本課題の目的から考えると、内藤らの尺度を利用して、学校適応感に加えて、登校している生徒に不登校感がどの程度・どんな風に存在するのかも調査できるように修正する必要がある。

もとより不登校と不登校感とは違うのだが、ここでは不登校生徒に限定するのではなく、登校している多くの生徒をも含む生徒の心に内在する「気分としての不登校感」を扱うことを目的としている。そこで「気分としての不登校感」の質問項目が必要となるので、新たに30の質問項目を追加した。内藤ら(1991)の「高校生用学校環境適応感尺度」の30質問は、一部の表現を変更したがそのほとんどを生かした。追加質問の作成にあたっては、不登校に対する考え方の転換点の内容を示していると思われる小浜・竹田(1991)から、現在の生徒行動についての質問として7質問、不登校生徒を精神的に支援してきたある精神内科医の学校への提言から3質問、そして日頃教育に携わる高校教育現場の教員5人で相談した結果から20質問を選んだ。これら計60問の質問項目への回答に因子分析を施すことにより、「不登校感も含む学校適応感尺度」を構成することにした。また、方法論上必ずしも適切とは言えぬが、個々の質問意図に配慮しながら調査結果を分析することから、新たに見えてくるものも取り上げることにする。

結果の整理(因子分析)

「不登校感も含む学校適応感尺度（以後、学校適応感尺度)」の分析は、「はい」か「いいえ」で回答された結果を、適応感の高い方を1点、低い方を0点にして得点化した。統計処理にあたってはSAS統計パッケージを使用した。

「学校適応感尺度」の弁別力を検討するため、まず被調査者を高適応得点群(H群)と低適応得点群(L群)に分けた。これら両群の各項目得点から、尺度としての弁別力を判断するために、60項目それぞれについてGP分析と平均値の差のt検定を行い、5％の棄却域を越えた39と45の項目を分析から取り除いた。

残った項目に因子分析（主因子法とバリマックス回転）を施し、固有値や寄与率から判断して4項目（26、27、29、46）を除外し、解釈可能な8因子解を採用して分析した結果が表1である。因子解釈は、項目の因子負荷量が0.35以上で他の因子で0.30以下の質問項目を中心に配列し直した上で検討し、表1の第7因子まで命名したのが以下のような因子カテゴリー名である。

表1のカテゴリー名	内藤ら(1987)の「学校適応感尺度」との対応
F1：行事等の学校生活充実感	f1：友人関係、f6：特別活動
F2：校則順応感	f2：規則態度
F3：進路意識	f3：進路意識
F4：学習意欲	f4：学習意欲
F5：不登校感	対応因子なし
F6：自己不全感・対人緊張	対応因子なし
F7：教師との話しやすさ	f5：教師関係

内藤ら(1987)の「適応感尺度」は6因子構造であり、本課題で得られた「不登校感」と「自己不全感・対人緊張」と命名した因子はなかった。それゆえ本「学校適応感尺度」での第5因子と第6因子（F5とF6）の有用性は高く、課題目的の「登校する生徒にも存在する不登校感」を検討するには適切な尺度と考えられる。

表2の左半分は、下位カテゴリーごとの平均値、標準偏差、平均値の男女差、および下位カテゴリーごとのα係数による信頼性係数である。また右半分には、下位カテゴリー間の関係がピアソンの相関係数で示してある。下位カテゴリーごとの平均値で「学校生活充実感(F1)」と「進路意識(F3)」が高値であることから、高校生が、日常の学校生活に充実感を感じ、進路のことについても無関心ではないと言える。下位カテゴリー間の相関係数からは、不登校感を持つ生徒が、特定領域に不登校感を持っているよりも、日常の学校生活の全般に不

表１　学校生活適応感尺度(Ｆ１からＦ７まで)

No.	項　　目	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	
5	文化祭や体育大会等の行事に積極的である。	0.65	-0.12	0.08	0.04	-0.05	0.02	0.13	-0.05	0.46
24	遠足や、II・R活動や学校行事が楽しい。	0.62	0.16	0.01	0.05	0.08	0.07	0.04	0.05	0.43
14	多くの友人を持っている。	0.57	-0.08	0.15	-0.01	0.12	0.20	0.04	0.11	0.42
12	II・R や学校行事には協力的である。	0.54	0.21	0.03	0.20	0.05	-0.03	0.12	0.01	0.39
36	自分は明るく社交的である。	0.52	-0.07	0.11	0.08	-0.11	0.26	0.08	-0.09	0.39
10	学校には人間的なぬくもりがあると思う。	0.45	0.18	0.07	-0.06	0.16	0.17	0.25	0.06	0.36
31	規則に対して不満がない。	0.08	0.70	0.09	0.13	-0.01	0.00	-0.06	-0.02	0.52
4	学校の規則は古くさく、私たちの考え方に合わないと思う。	0.08	0.63	0.01	-0.04	0.09	-0.04	-0.04	0.04	0.42
17	意識しなくても、規則に違反したことがない。	0.03	0.43	-0.01	0.15	0.06	0.11	-0.06	0.19	0.26
1	学校の規則はあたりまえだと考えている。	0.10	0.40	0.13	0.07	0.04	-0.09	0.06	0.00	0.21
44	自分に合った進路を考えている。	0.13	0.05	0.67	0.15	0.10	0.05	0.02	0.04	0.50
18	進路のことを真剣に考えている。	0.05	0.05	0.64	0.13	0.13	-0.12	0.20	0.10	0.52
6	進路目標は明確である。	-0.02	0.01	0.63	0.23	-0.05	-0.04	0.22	-0.06	0.51
32	将来なりたい職業を決めている	0.10	-0.02	0.57	0.10	-0.06	0.09	0.00	0.04	0.36
16	勉強に積極的である	0.13	0.01	0.13	0.58	0.13	-0.01	0.13	0.09	0.42
30	授業をよく理解している。	0.08	0.22	0.05	0.47	0.11	0.09	0.01	-0.06	0.31
3	ある程度勉強ができる方だ。	0.11	0.09	-0.01	0.44	0.10	0.05	0.01	-0.23	0.28
22	宿題や課題を必ずやってくる。	0.00	0.03	0.10	0.43	0.02	0.07	-0.03	0.10	0.21
42	家庭学習を毎日時間を決めてやる。	-0.03	0.01	0.12	0.41	0.03	-0.04	-0.04	0.15	0.21
47	勉強が楽しいと思っている。	0.05	0.13	0.11	0.38	0.05	-0.06	0.18	0.04	0.21
13	学校をやめたいと思っている。	0.16	0.19	0.07	0.04	0.54	0.01	0.13	0.03	0.38
58	学校に行く目的がわからない。	0.11	0.17	0.12	0.11	0.45	0.29	0.29	0.15	0.45
60	行かなくてはと思いつつ、何日も学校を休んでしまう。	0.09	0.01	0.01	0.07	0.44	-0.05	-0.11	0.01	0.22
51	自分は何のために生きているかわからないと思っている。	0.08	0.05	0.21	0.03	0.24	0.53	0.11	0.07	0.41
49	友達とくらべて、自分がみじめでいやになる。	0.11	0.05	-0.03	0.02	0.04	0.51	-0.08	-0.12	0.29
35	みんなには本当の自分をうまく表現できない。	0.11	-0.09	0.02	-0.01	-0.06	0.47	0.08	-0.08	0.26
38	廊下で人とすれ違う時、緊張する。	-0.02	-0.03	0.01	-0.01	-0.05	0.39	-0.03	0.14	0.18
11	友達のように親しみを感じる先生がいる。	0.24	0.05	0.08	0.05	0.04	-0.02	0.53	-0.01	0.35
21	何でも相談できる先生がいる。	0.12	0.04	0.09	0.17	-0.01	0.10	0.39	0.18	0.24
57	先生と話す機会を持とうとしている。	0.22	0.07	0.12	0.12	0.01	-0.08	0.35	0.22	0.25
19	友人がいるから学校が楽しい。	0.51	-0.04	0.13	-0.06	0.35	0.06	0.14	-0.04	0.43
48	学校に魅力を感じない。	0.37	0.38	0.06	0.04	0.29	0.20	0.12	0.00	0.42
34	この学校の先生を信頼している。	0.30	0.37	0.18	0.19	0.07	0.03	0.19	0.18	0.37
33	学校は活気に満ちていると思う。	0.31	0.51	0.09	0.07	0.01	0.08	0.04	-0.16	0.41
37	自分の将来に希望を持っている。	0.32	0.05	0.53	0.10	0.01	0.15	-0.10	0.10	0.44
9	勉強の目標を持って努力している。	0.03	0.01	0.31	0.47	0.10	0.00	0.15	0.19	0.38
2	この学校の先生と気軽に話せる。	0.38	0.07	0.18	0.03	-0.10	0.12	0.40	-0.25	0.43
53	苦労して勉強しなくてもなんらかの進路があると考えている。	-0.04	0.09	0.08	0.10	0.07	-0.05	0.08	0.47	0.26
55	進級にさしつかえないなら学校を休んでもよいと思っている。	0.08	0.22	-0.06	0.12	0.34	0.04	-0.01	0.34	0.30
25	自分の進路のためには苦しい勉強にも耐える。	0.24	0.09	0.28	0.24	0.14	0.13	0.04	0.34	0.35
54	規則を守るという自覚を持っている。	0.13	0.28	0.16	0.19	0.12	-0.05	0.06	0.31	0.28
56	なぜ勉強するのかわからない。	-0.03	0.19	0.20	0.25	0.33	0.21	0.18	0.18	0.36
52	クラブに所属し充実感を持っている。	0.33	0.23	0.01	0.09	0.03	-0.10	-0.02	0.16	0.21
15	この学校の先生に対して素直である。	0.31	0.24	0.19	0.14	0.17	0.10	0.12	0.12	0.27
7	時々学校に行きたくなくなる。	0.09	0.25	0.00	0.22	0.30	0.15	0.07	0.09	0.25
50	学校から一歩出たら楽しいことがいっぱいあると思う。	-0.09	0.32	-0.15	-0.04	0.05	-0.02	0.09	0.09	0.16
43	朝起きられなくて遅刻してしまうことがよくある。	-0.05	0.05	-0.01	0.13	0.32	0.00	-0.12	0.06	0.14
41	夜遊びをして朝まで家に帰らなかったことがある。	-0.15	0.30	-0.01	0.09	0.27	-0.08	-0.22	0.06	0.25
59	たいていの放課後はアルバイトをしている。	-0.02	0.34	-0.07	0.17	0.10	-0.16	0.10	0.06	0.20
40	学校よりアルバイトしている時のほうが楽しいと思っている。	0.09	0.33	-0.08	-0.01	0.25	-0.05	0.16	0.01	0.22
28	クラスの中では緊張して疲れやすい。	0.18	-0.06	-0.01	0.04	0.05	0.33	-0.04	-0.01	0.15
23	学校に行くのが怖い。	-0.05	0.00	0.02	0.05	0.26	0.26	0.11	-0.05	0.15
20	この学校の誰とでも気軽に話せる。	0.31	-0.02	0.01	0.04	-0.09	0.33	0.29	-0.07	0.30
8	悩みなどを話せる友人がいる。	0.29	-0.19	0.24	0.02	0.02	0.16	0.10	-0.07	0.22
	固有値	7.78	3.49	2.87	2.23	1.71	1.65	1.58	1.42	17.40
	寄与率(%)	14.41	6.46	5.31	4.14	3.16	3.06	2.84	2.63	

表2　学校適応感カテゴリーごとの平均値と信頼性係数，およびカテゴリー間相関

カテゴリー名	項目番号	カテゴリー毎の平均値と	男女差		α係数	カテゴリー間相関					
			男子	女子		充実感(F1)	校則順応(F2)	進路意識(F3)	学習意欲(F4)	不登校感(F5)	対人緊張(F6)
行事等の学校生活充実感(F1)	5,24,14,12,36,10	.57 (.32)	.50 《	.64	.76						
校則順応感(F2)	31,4,17,1	.35 (.33)	.35	.34	.66	.18**					
進路意識(F3)	44,18,6,32	.55 (.37)	.49 《	.61	.75	.21**	.11*				
学習意欲(F4)	16,30,3,22,42,47	.18 (.22)	.17	.18	.63	.20**	.22**	.28**			
不登校感(F5)	13,58,60	.16 (.24)	.18 》	.13	.51	.28**	.23**	.18**	.24**		
自己不全感・対人緊張(F6)	51,49,35,38	.33 (.29)	.37 》	.30	.54	.24**	.01	.09*	.07	.19**	
教師との話しやすさ(F7)	11,21,57	.19 (.27)	.20	.19	.55	.35**	.12**	.25**	.20**	.22**	.07

《はt検定における有意水準で《は $p<.01$
** はピアソンの相関係数による有意水準で*: $P<.05$, **: $P<.01$

登校感を持っていると考えられる。

会話等による「親密感尺度」

家族や友人との間の会話や精神的支援等による親密感の尺度(以下「親密感尺度」と呼ぶ)は、久田・千田・簑口(1989)の学生用ソーシャルサポート尺度(SESS)を参考にし、サポート以外に共通の話題に関する5質問項目と、期待に応えようとするなどの関係に関する5質問項目を新たに加えて作成した。なお、SESSの質問表現には少し手を加えた。

結果の整理(因子分析)

「親密感尺度」の作成にあたっては、「はい」を1点、「いいえ」を0点として、親密源である評定対象者別に項目得点を単純平均した。評定対象者ごとに主成分分析とバリマックス回転による因子分析を施した。父親、母親、兄弟、先生、学内友達、学外友達のすべてにおいて、固有値や寄与率から2因子解が適切であった。表3が父親、母親、兄弟、学内友達、学外友達についての、ま

表 3　会話等による親密感尺度(15は除外)

	父親F1	父親F2	母親F1	母親F2	兄弟F1	兄弟F2	内友F1	内友F2	外友F1	外友F2
11 悩みや不満をぶちまけても、いやな顔をしないで聞いてくれる人。	0.69	0.07	0.72	0.10	0.69	0.25	0.73	0.12	0.82	0.14
12 いつでもあなたのことを信じてくれる人。	0.60	0.28	0.71	0.09	0.66	-0.04	0.70	0.10	0.77	0.15
10 どうしてよいかわからなくなった時に、相談に乗ってくれる人。	0.67	0.08	0.71	0.03	0.66	0.30	0.80	0.07	0.81	0.11
7 あなたが落ち込んでいると元気づけてくれる人。	0.65	-0.07	0.69	-0.05	0.68	0.30	0.77	0.10	0.83	0.17
6 あなたがする話をいつもよく聞いてくれる人。	0.63	-0.05	0.69	0.04	0.72	-0.06	0.59	-0.16	0.79	0.10
9 何かうれしいことがあった時、自分のことのように喜んでくれる人。	0.63	0.17	0.69	0.09	0.66	0.22	0.76	0.14	0.81	0.17
2 クラブや学校行事や学内の話題をよく聞いてくれる人。	0.64	-0.03	0.65	0.01	0.68	-0.08	0.54	-0.04	0.60	0.01
8 あなたが誰かに何かいやなことを言われた時、なぐさめてくれる人。	0.57	-0.14	0.62	-0.08	0.56	0.11	0.79	0.10	0.81	0.20
1 いつも共通の話題があって話しやすい人。	0.58	-0.17	0.61	-0.05	0.65	-0.03	0.59	-0.18	0.67	0.11
3 勉強や将来の進路の話題をよく聞いてくれる人。	0.55	0.12	0.60	0.10	0.57	0.14	0.52	-0.01	0.62	0.04
5 あなたを気遣っていつもよく話しかけてくれる人。	0.50	0.14	0.55	0.18	0.61	0.17	0.58	0.19	0.65	0.16
4 テレビや映画や音楽や趣味等の話題についてよく話を聞いてくれる人。	0.48	-0.11	0.53	-0.11	0.64	-0.10	0.46	-0.18	0.71	0.05
16 私はいつも( )のそばにいると安心できる。	0.54	0.03	0.64	0.03	0.64	0.05	0.73	0.21	0.72	0.31
14 私は( )の喜ぶ顔を見るのがうれしい。	0.53	0.33	0.48	0.30	0.56	0.09	0.61	0.29	0.61	0.33
17 私はいつも( )の気に入るように振る舞っている。	-0.01	0.70	0.00	0.76	0.06	0.71	0.07	0.77	0.07	0.83
13 私はいつも( )の機嫌をうかがっている。	-0.18	0.70	-0.21	0.70	-0.12	0.71	-0.16	0.66	0.01	0.74
15 私はいつも( )の期待に応えようとしている。	0.40	0.45	0.34	0.49	0.35	0.42	0.19	0.55	0.27	0.53
固有値	5.18	1.45	5.92	1.45	6.11	1.37	6.31	1.56	8.09	1.44
寄与率	30.49	8.52	34.85	8.56	35.94	8.05	37.14	9.18	47.59	8.49
α係数	0.86	0.47	0.89	0.47	0.89	0.45	0.90	0.46	0.94	0.59

F1は会話や精神的支援による親密感、F2は自己提示

表 4　先生との親密感尺度(11を除く)

項目	F1先生との会話	F2先生への依存的親密感
1 いつも共通の話題があって話しやすい人。	0.69	0.21
6 あなたがする話しをいつもよく聞いてくれる人。	0.61	0.23
7 あなたが落ち込んでいると元気づけてくれる人。	0.57	0.32
8 あなたが誰かに何かいやなことを言われた時、なぐさめてくれる人。	0.57	0.31
2 クラブや学校行事や学内の話題をよく聞いてくれる人。	0.57	0.09
4 テレビや映画や音楽や趣味等の話題についてよく話しを聞いてくれる人。	0.56	0.05
5 あなたを気遣っていつもよく話しかけてくれる人。	0.55	0.13
3 勉強や将来の進路の話題をよく聞いてくれる人。	0.48	0.03
9 何かうれしいことがあった時、自分のことのように喜んでくれる人。	0.45	0.19
16 私はいつも( )のそばにいると安心できる。	-0.33	0.72
12 いつでもあなたのことを信じてくれる人。	0.22	0.68
10 どうしてよいかわからなくなった時に、相談に乗ってくれる人。	0.34	0.59
15 私はいつも( )の期待に応えようとしている。	0.22	0.53
14 私は( )の喜ぶ顔を見るのがうれしい。	0.15	0.49
11 悩みや不満をぶちまけても、いやな顔をしないで聞いてくれる人。	0.43	0.56
固有率	4.46	1.47
寄与率	29.74	9.77
α係数	0.77	0.63

た表4が先生についての「親密感尺度」である。両表において累積寄与率の範囲は、ほぼ39%から56%であった。2因子のうち、一方の因子負荷量が0.45以上で、他方の因子が0.35以下を目安にして項目を配列整理した。α係数による信頼性は、第1因子で、父親が0.86と先生が0.77であったが、その他は0.89以上であった。第2因子のα係数はすべてで低かった。

父親、母親、兄弟、学内友達、学外友達との親密感（表3）は、同じ項目で尺度が構成されているが、先生（表4）だけは若干の項目の入れ替わりがある。表3の因子カテゴリーの命名では、各第1因子(F1)を「会話や精神的支援等による親密感」とし、各第2因子(F2)を「(17)気に入るように振る舞っている」と「(13)機嫌をうかがっている」から「自己提示」と命名した。表4の先生については、第1因子を「先生との会話等による親密感」、第2因子を「先生への依存的親密感」と命名した。

考　　察

大衆的基盤としての学校忌避感覚が存在するか

表2の「カテゴリーごとの平均値」によって描いた図1で、不登校感を感じ

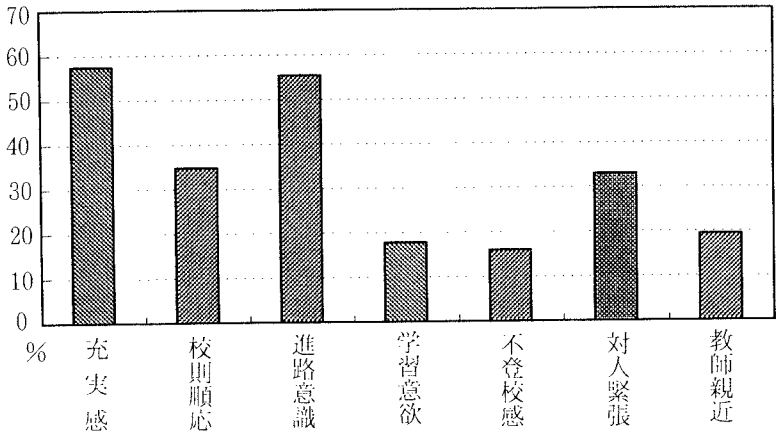

図1　学校適応感

ている生徒は、森田(1996)の言う「不登校の潜在群が40%にものぼる」という結果と比べて、16%とかなり少ない値である。しかし、今回調査した5高校の特徴や、不登校感の尺度項目(「学校をやめたいと思っている」「行かなくてはと思いつつ何日も学校を休んでしまう」「学校に行く目的がわからない」)から考えて、16%は決して少ないとは思えない。このことは、学校に対する忌避感覚が少なからず存在するが、小浜・竹田(1991)の指摘するような「大衆的な基盤での……」とまで言い切れるかは疑問であろう。

16%の生徒が不登校感を持ち、33%の生徒が対人緊張感を抱き、学習意欲がある生徒は18%にすぎない。しかしながら、他方で学校生活に充実感を感じている生徒が57%に達している。この結果は、学習意欲を持って登校している生徒は少ないにもかかわらず、学校での生活には充実感を感じている生徒がかなり存在するといえる。それゆえ、生徒たちにとって学校は、学習意欲を持って授業を受ける場として機能しているというよりも、多くの友人との関係を切り結び、共に行事を楽しく行う場として機能しているといえるだろう。

また逆にこの結果は、学校に充実感を感じている生徒が結構いるにもかかわらず、不登校感や対人緊張感を持つ生徒が少なくないともいえる。実際に教育現場で働いていると、にぎやかに友人達とおしゃべりを続ける生徒たちのパワーを見る一方で、内面に不安を持つ生徒たちを見ることが多い。学校は、友達との関係を切り結ぶ場として主に機能しているがゆえに、彼らとの人間関係に不安を感じる生徒が少なからずいることがわかる。

学校以外の場における知覚刺激が多様になり、次々と喚起される欲望を抑圧してまでも、困難な勉強に耐えることの必然性が、生徒たちには理解されにくくなってきている。このような中で、生徒の学校への意識は、友達との関係を切り結ぶことにあり、それ以外の学校教育的な集団的な体制からは離反している。友達との関係が築けなければ、生徒たちは脆くも欠席がちになってしまうのが、教育現場の現状である。

表5　学校適応感と会話等親密感との相関

学校適応感カテゴリー名	会話等親密感					先生との会話	先生に依存的な親密感
	父親	母親	兄弟姉妹	学内友達	学外友達		
行事等の学校生活充実感(F1)	.24**	.28**	.13**	.45**	.12**	.20**	.24**
校則順応感(F2)	.09*	.13**	.08	-.00	-.24**	.09*	.16**
進路意識(F3)	.14**	.16**	.13**	.21**	.10*	.11*	.11*
学習意欲(F4)	.10*	.13**	.03	.07	-.07	.18**	.14*
不登校感(F5)	.14**	.19**	.12**	.18**	.04	.12**	.11**
自己不全感・対人緊張(F6)	.09*	.02	.11*	.26**	.15**	.11*	-.01
教師との話しやすさ(F7)	.17**	.10*	.05	.22**	.00	.40**	.37**

** はピアソンの相関係数での有意水準　*：P<.05, **：P<.01

学校適応感と家族との会話や親密感との相関

表5は、学校適応感の7因子と会話対象者への親密感との相関係数であり、ほとんどの相関係数は小さかったが、統計的には有意であった。

生徒たちの人間関係において、基本的な他者との社会的支援関係や親密感が、学校適応感との間でなんらかの関係があるのはもっともなことである。とりわけ、「行事等の学校生活充実感(F1)」と父親や母親の「親密感」との相関が0.24と0.28であったのは、父親や母親との会話が、楽しい学校行事のことや学校の友人のことであるからと考えられる。学校にぬくもりがあると思っていれば、親に話してみたい話題も自ずと多くなるのであろう。逆に、学校生活が充実していなければ、その分だけ親との会話も少なくなるのだろう。親と子の会話のほとんどは、子どもの勉学や教育に関わることを除けば、さほど話題がないといえるだろう。

「行事等の学校生活充実感(F1)」と学内友達の「親密感」との相関係数は0.45と高く、両者の関係が密接であることを示している。「進路意識(F3)」と学内友達の「親密感」との相関係数が0.21なのは、落ち込んだり・喜んだり・気を遣ったりする時、友達との会話の話題に進路のことも含まれているからで

ある。「自己不全感・対人緊張(F6)」と学内友達の「親密感」との相関係数0.26は、「自己不全感・対人緊張」の対象が、親や兄弟姉妹や先生ではなく、学内の友達であることを示している。これは先に触れた、友達との人間関係に不安を持つ生徒が少なくないことを意味している。さらに「教師との話やすさ(F7)」と学内友達との「親密感」が0.22なのは、学内の友達に気軽に話せる態度や雰囲気で、先生とも友達のように話しあったり相談したりできていると考えられる。「教師との話しやすさ(F7)」と「先生との会話」や「先生に依存的な親密感」との相関が、それぞれ0.40と0.37と高いのは至極当然で、依存的な関係であるがゆえに話しやすく、逆に話しやすいから親密感が増しているのである。

父母との親密感の違い・父性の喪失・母娘の密着について

表5の「学校適応感」と関連において、父親にも母親にもほぼ同じ傾向が見られる。ただ「自己不全感・対人緊張(F1)」と母親の「親密感」とに相関がなく、父親のそれとには小さいが有意な相関が得られている点である。全体としては、子どもは父親にも母親にも同じような親密感を持ちながら接しているといえる。

最近教育現場では、父性の喪失と不登校感とを関連づけて考える人が増えてきている。ユング派心理学者の安溪・矢吹(1989)が「父なるもの、父親原型、原型的な父親像、父親の神話的側面との関係を回復することが必要」と述べていることなどが、その背景として影響しているものと考えられる。しかし、彼らの指摘するような「集合無意識としての父性の復権」を考えずとも、「学校適応感」との関わりにおいては、一般的な他者との間に存在するのと同質な社会的な支援関係や親密感が、父親や母親との間にも存在すればよいといえよう。

図2は、男子生徒と父・母との「親密感」、女子生徒と父・母との「親密感」、すなわち、「父と息子、母と息子、父と娘、母と娘」の親密感を図示している。父親は仕事で忙しいのか息子や娘との親密感が低く、娘は母親との間の親密感

において格段に高い。この量的な差違は、一般に語られる親子関係の親密さを反映しているいるが、父親も母親と同程度に子どもと親密感を持つことが望まれる。しかし、不在がちの父親に、中途半端に「父性」や「父権」を期待しないほうがよい。精神科医・斉藤実（1995）は、父親が「中途半端に存在」すると子どもに混乱を引き起こすと指摘してい。特に、いつもの不在を補償しようとするかのような父権の強調が突発的に繰り返される場合、子どもの成長に不可欠な自我理想（理想的な自己のモデル）の発達が阻害され、強硬で懲罰的な超自我（内部監視装置）がいつまでも力を振るう幼児的な人格が残ってしまうと述べている。

また娘と母親の非常に高い親密感について、Julia Kristeva（1982）は、「娘」と「母親」の両者が絡み合う中で成熟していく図式を提示している。彼女は、一人の人間の中で同時に「母親」でありかつ「娘」でもある女性が、実際の「娘」と親密感を深めることで、「母性」を巨大な神話化することから逃れ、癒やしを得ている、と述べている。とするならば、娘との間の「親密感」は母親が量的により多く持っているだけであって、父親も量的に少なくとも同質の「親密感」を持っていると考えられる。「不登校感」などの「学校適応感」との関連で、母親と娘の「親密感」、父親と娘の「親密感」は同じものであるだろう。

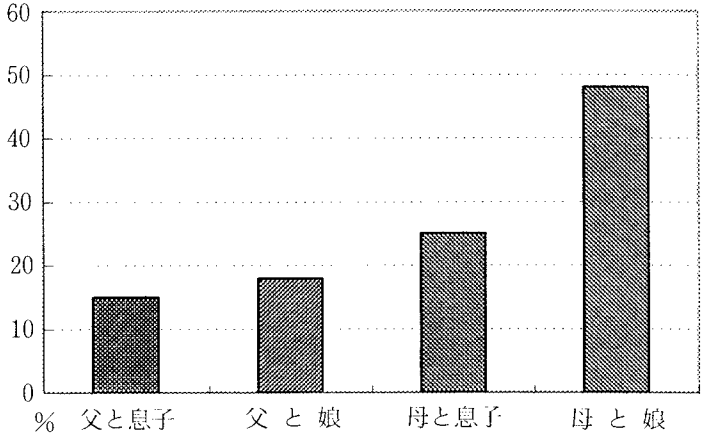

図2　会話等による親密感

学校によって異なる不登校感

最後に、不登校感が学校によって異なることにも、注意を向けておかなくてはならない。図3は、調査した5高校の学年別に、「学校適応感尺度」の「行事等の学校生活充実感(F1)、校則順応感(F2)、不登校感(F5)、自己不全感・対人緊張(F6)」についての結果である。E校は、校則順応感が飛び抜けて高く、充実感も他校より高い、また不登校感が他校よりも低い。E校の校則順応感の高さは、制服のないことが反映されているのかもしれない。しかしながら、このE校の対人緊張感は他校と同程度であって、校則の上から学校生活の可視化が緩やかなものではあっても、生徒相互の緊張感が別な存在として生徒に内在しているようである。対人緊張感が比較的低いD校は、地元集中受験校であることが原因なのかもしれない。

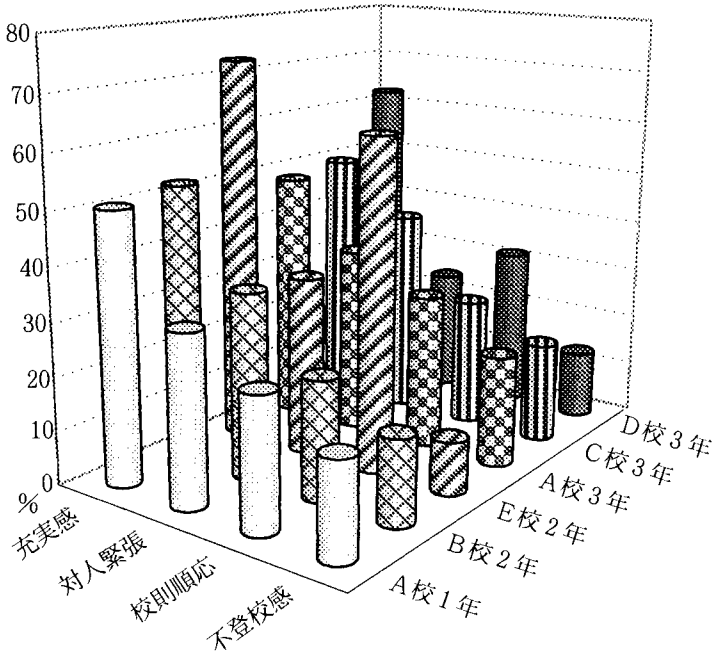

図3　不登校感の学校間格差

要　約

不登校とはどのような行動なのか。精神医学、臨床心理学、教育学、社会福祉学だけでなく、様々な親の会や運動団体から「不登校」へのアプローチが試みられている今日、高校教育現場でも「不登校気分」が、登校している生徒の心の中にどれだけ存在しているのかが問題になっている。この「不登校気分」の在りようを調査し、「学校適応感」と「家族や友人との会話等による親密感」との関連を分析・検討した。結果は次のように要約できた。

① 現在登校している生徒にも、かなりの不登校感が存在していた。

② 学校は、友人との関係を切り結ぶ場として機能していた。

③ 父や母との会話による結びつきは、学校適応感と関連性があった。

なお、調査に協力いただいた5校の生徒や先生と、データ処理などに指導助言をいただいた大阪府立大学総合科学部人間科学科の皆さんに、感謝申し上げます。

引用文献

安渓真一・矢吹省二 1989 日本的父性の発見，有斐閣

久田満・千田茂博・簑口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集，143-144.

Julia Kristeva 1982 愛の関係と表象：精神分析理論に照らして，現代思想，10

小浜逸郎・竹田青嗣 1991 力への思想，学藝書林

森田洋司 1991 「不登校」現象の社会学，学文社

森田洋司 1996 高校教育展望9-12，小学館，10

内藤勇次・浅川潔司・高瀬克義・古川雅文・小泉冷三 1987 高校生用学校環境適応感尺度作成の試み 兵庫教育大学研究紀要，7，135-146

斉藤実 1995 「家族」という名の孤独，講談社

The student's adjustment to school

Masami Hiraki and
Masahiko Kirimura

The purpose of this article was to investigate the relationship between how students feel about school and how much or how intimate their relationships are with their parents. In addition, a further aim was to also study the potential evasion of students attending school. For this study, thirty questions selected from previous studies were administered to 496 senior high-school students. For the subject of the intimacy of parents and students via conversation, fifteen questions were selected from the "Scale of Expectancy for Social Support". In conclusion, this study produced produced two hypotheses through factor analysis: (1)Potential evasion of school was recognized in high school students. (2)Parent-child intimacy through conversation had an influence on school the student's adjustment to school.